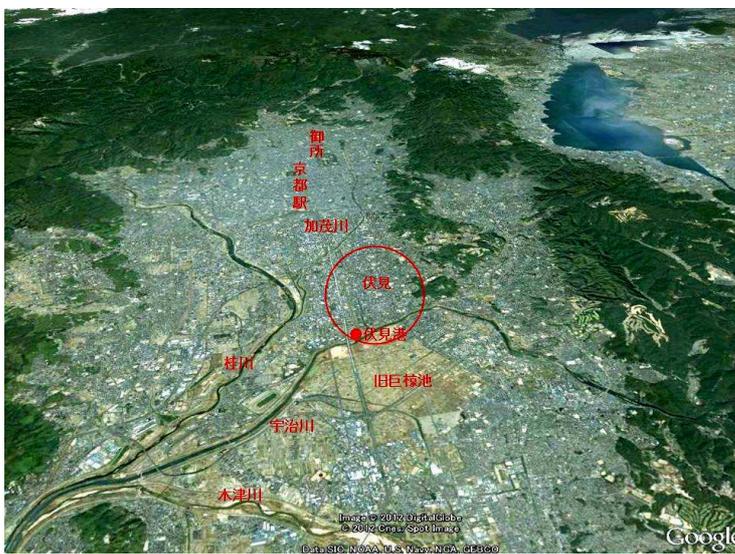


伏見港・伏見の街を歩く 2012.5.15



5月15日 葵祭が中止になった雨が降ったり止んだりの一日 思いついて 京都伏見の街を歩きました

京都の一番南の端「京都 伏見」 周辺はよく通るのですが、知っているようで知らない歴史の街 京阪電車が淀川に沿って京都に向かい、桂川・宇治川・木津川の合流点淀を過ぎて、中書島へ入るとまた いつもの疑問がわいてくる。ここはかつての「伏見港」があったところで 淀川を溯ってきた船がこの伏見港に入り、京都の街へ人も物資も運ばれた。「時代劇でよく見る伏見の港は残っているのだろうか?? 港の入口はみたことないなあ・・・」と。

この伏見の港へは 江戸時代 角倉了以が開削した高瀬川が通じ、また、明治には琵琶湖疏水がこの伏見までつながり、蒸気船が行き来したという。大阪落語「30石」は江戸時代の伏見の情景を生き生きと再現し、また、幕末 坂本竜馬が襲われた寺田屋事件の場でもある。

電車が中書島を出ると車窓からは、疎水に沿って建ち並ぶ酒蔵がいくつも眺められ、ここは「灘の酒」とならぶ「伏見の酒」の名産地。この疎水は琵琶湖疏水 鴨川の東岸に沿うが京都の街中ではすでに消えていて 北の蹴上インクライン周辺で顔を出す。また、江戸の高瀬川は京都の街中では鴨川の西岸を加茂川に沿のですが、伏見は加茂川から離れた西側宇治川の岸。どこかで 加茂川を横切らねばならないが・・・

伏見の港も酒蔵もそして高瀬舟に琵琶湖疏水 もう頭はぐちゃぐちゃ。おまけに この中書島の対岸にはかつて広大な巨椋池が広がり、淀川へ注ぐ3河川がここで合流して南の淀川へ下ってゆく、洪水の常襲地。太閤秀吉が土木大事業を行い この巨椋池を切り離し、太閤堤を築き、伏見の港を作り、洪水を制したのだという。

何度か歩いたことはあるのですが、しっかり歩いたことなし。 今日是一日暇。ゆっくり伏見の街「好奇心にかられて 何でも見てやろう」 そして「伏見の酒 試飲しよう」と。

知っているようで知らなかった街 伏見 だいぶ疑問も解けました。 観光地になりつつあると聞きますが、勝手気ままに街歩きを楽しめる街でした。

また、歩いていて 私の故郷「尼崎」の名を町名に見つけました。(南尼崎町 北尼崎町 東堺町)
秀吉が伏見港を作り、城下町として、堺や尼崎から商人を連れてきて、城下に商人町を作った名残とか・・・。
思わぬところで眼にする「尼崎」でした。

ついでながら「中書島」は俗称 住所表記にはこの地名は出てこない。明治の末 京阪電車「中書島駅」が開設され、京都の南入口 若い人たちが通う歓楽街・新地として 昭和高度成長期まで大いに栄えて 中書島の名前が有名になった。
今は静かな落ち着いた市街地。 京都の帰りに途中下車して うまい酒をゆっくり呑む人も多いとか・・・・・・
京都の観光地 寺社歩きもいいのですが、こんな街歩きもお勧めです。

京都の南端 「伏見」の顔

京都盆地の南端(淀川に注ぐ三河川・巨椋池が作る広大な湿地を秀吉が大土木工事を実施し、政治・経済の中心に変身させた地で、秀吉以降 伏見桃山時代から昭和 そして現在まで 大いに栄えた街である

- 豊臣秀吉が開いた城下町・港町 伏見桃山時代の政治・経済の中心地
 - 京都盆地の南端 淀川に注ぐ桂川・宇治川・木津川の合流点 交通の要衝
 - 淀川治水の要 秀吉の大規模河川改修工事で作られた街「伏見」と太閤堤
- 城がなくなった江戸期以降も大阪と京都を結ぶ水運で隆盛した港
 - 江戸期 角倉了以が開削した新高瀬川 三十石船と十石船
 - 昭和期 琵琶湖疏水(鴨川運河)を開削 大阪-京都-琵琶湖の水運
- 名水の地「伏見の酒」 月桂冠・黄桜・月の桂・神聖・玉乃光・富翁 ……………
灘の「男酒」に対して『女酒』ともいわれる決め細かいまるやかな口当たり
- 宇治川の対岸に広がる広大な「巨椋池」の干拓
- 幕末 坂本竜馬 寺田屋事件の地
慶応2年(1866年)に発生した伏見奉行による坂本龍馬襲撃事件。

● 伏見 中書島 伏見港のあった地

現在の京阪中書島駅を中心とした地域であり、南北に竹田街道が通っている。
四方を川(南は宇治川、三方は淀川)に囲まれており、かつて島であった名残をとどめている。

文禄年間、中務少輔の職にあった脇坂安治が宇治川の分流に囲まれた島に屋敷を建て住んだことから「中書島」の名前が生まれたとされる。豊臣秀吉によって開発され武家屋敷が立ち並ぶようになったが江戸時代前期に荒廃したが、その後、伏見城下にあった遊廓が移転され、繁栄するようになる。
酒の名所であるために遊びに来る人が多く、また、宇治川に近く、交通の便が良い中書島は遊廓であると同時に花街でもあり、祇園をしのぐほどの名妓を輩出してきた。明治末期には京阪電車が開通し、ますます栄えるようになったという。

ところで、こんな過去を持つ場所であり、年配の関西人にはなじみの名前であるが、現在は普通の住宅地であり、花街、遊廓時代の面影はほとんどない。
また、「中書島」の地名は残っておらず、京阪電車の駅名として残るのみ。
これも 時代の流れか……

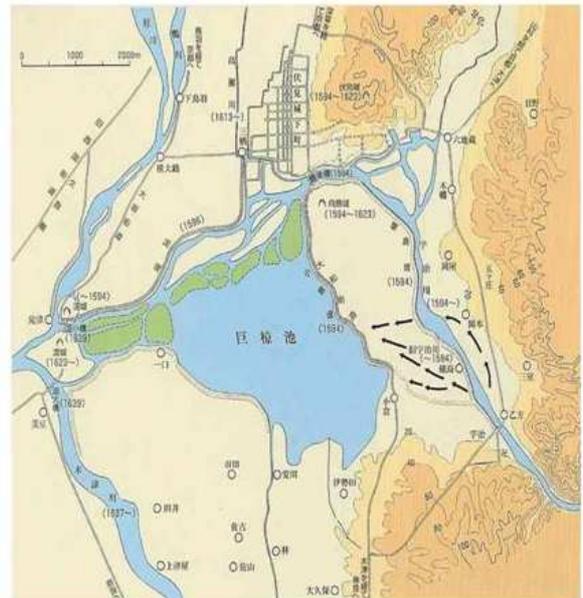


伏見港は秀吉によって作られた人工の城下町・港町

豊臣秀吉による巨椋池周辺の大改修と伏見港の建設

秀吉の時代の巨椋池沿岸図

当時の巨椋池には、宇治川・桂川・木津川が流れ込んでいたため、大雨が降ると巨椋池の周辺は洪水に見舞われていました。そこで、秀吉は巨椋池周辺に堤を築き宇治川の流れを変え、巨椋池の洪水を抑えるとともに、宇治川の流れを利用する伏見港を造りました。



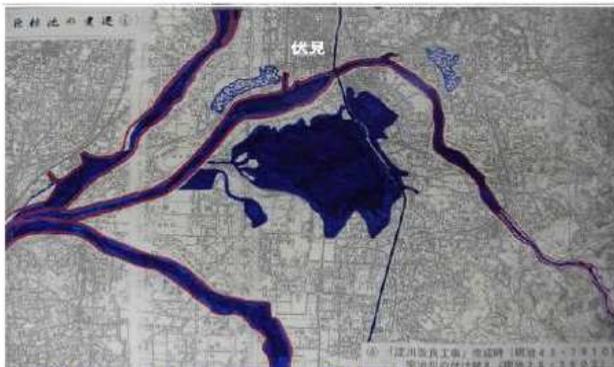
淀川改修・巨椋池干拓と三川合流点周辺の地形変化



秀吉による河川工事前平安時代のままの姿
文禄堤（木間堤）着手前 文禄以前（1590）



秀吉による河川工事後 文禄5年（1596）
・文禄堤の築造、左岸連続堤の概成・文禄堤により宇治川と巨椋池の分離
・秀吉の建設した城下町伏見に港が設けられ、交通の要衝になった



明治の改良後 明治18（1885）木津川の付け替え
明治35（1902）宇治川の付け替え



昭和の改修・巨椋池干拓後（現在）
巨椋池干拓 大正7年（1918）～昭和16年（1941）
三川合流点の道流堤、引堤等 昭和8年（1933）
今の堤が完成 昭和43年（1968）

水運 伏見港の要 「高瀬川」と琵琶湖疏水（鴨川運河）





伏見港船溜まりを埋めて整備
伏見港公園
体育館、プールやテニスコートなどの
諸施設の丘を抜けると伏見港(瀬川)
の岸に出る。



宇治川派流・伏見港は豊臣秀吉の伏見城築城流路改修によって形成され、各時代にわたって京都・大阪を結ぶ交通の要衝として栄えた河川港である。幕末には、寺田屋騷動や坂本竜馬の活躍などがわが国の歴史の主要な舞台ともなった。また、角倉了以の高瀬川開削、近代の琵琶湖疏水開削、淀川改修などと深くかかわるなど、わが国の政治経済・土木技術史上極めて高い歴史意義をもった地域である。

中書島 伏見港公園の案内板より



南側 濠川の宇治川出口方面 左:三栖洗堰 右:三栖閘門



伏見港

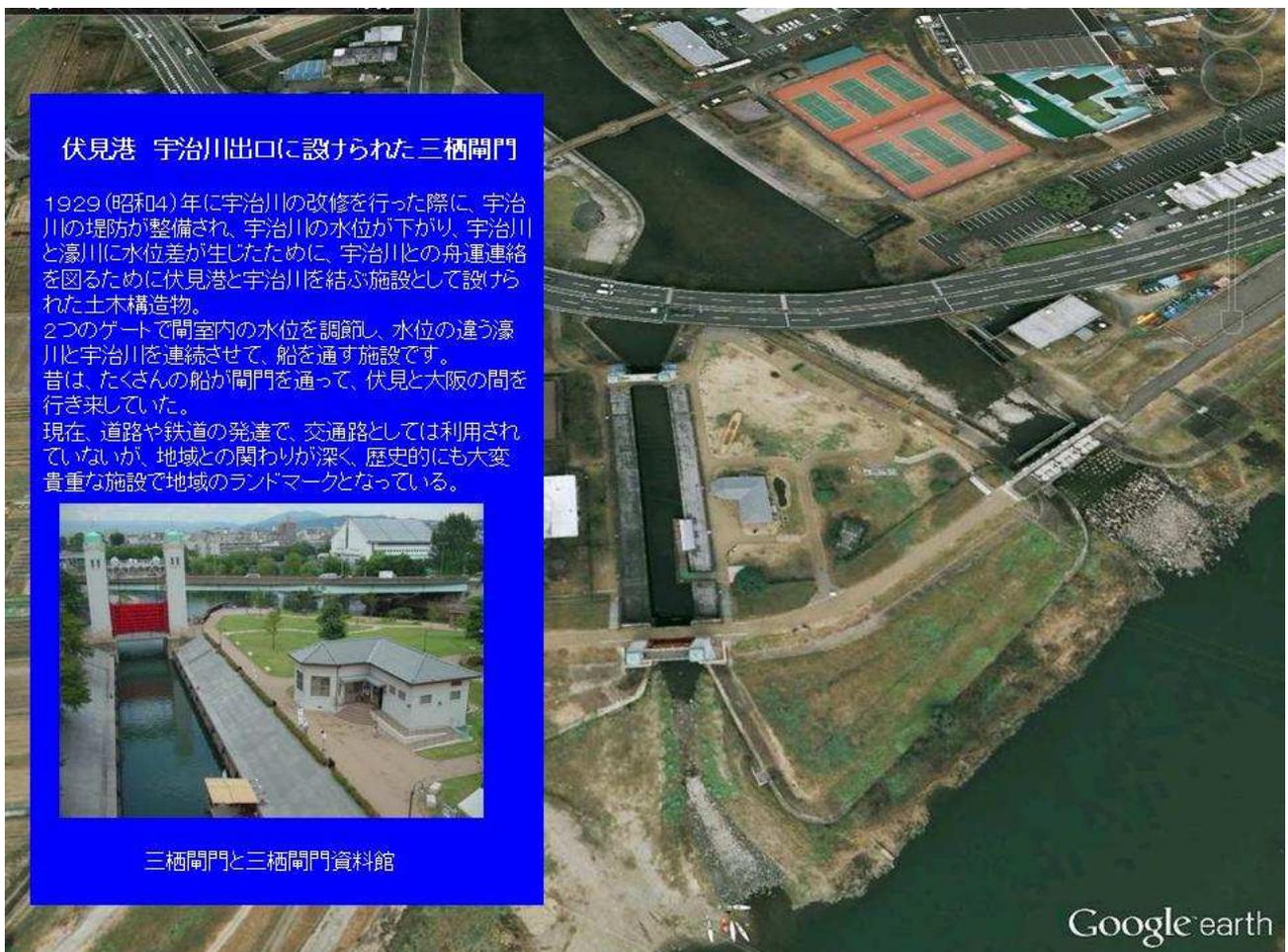
濠川東岸より水路の上流 伏見の町・京都側
木橋の向こうに京阪の鉄橋が見える



木橋を渡った対岸から伏見港水路全景 インターネットより



木橋を渡って 対岸を宇治川への出口 三栖閘門へ 2012.5.15.



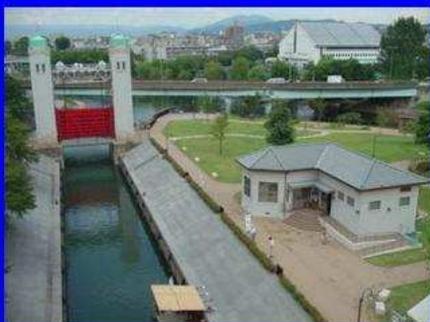
伏見港 宇治川出口に設けられた三栖閘門

1929 (昭和4)年に宇治川の改修を行った際に、宇治川の堤防が整備され、宇治川の水位が下がり、宇治川と濠川に水位差が生じたために、宇治川との舟運連絡を図るために伏見港と宇治川を結ぶ施設として設けられた土木構造物。

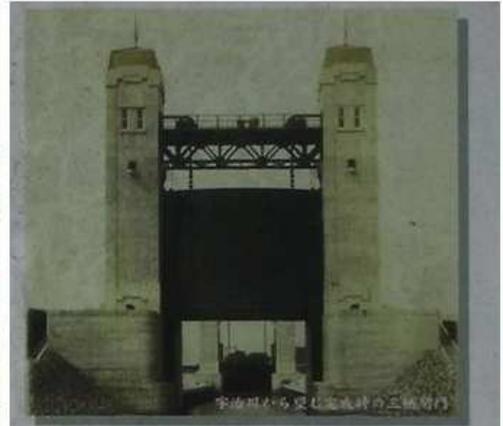
2つのゲートで閘室内の水位を調節し、水位の違う濠川と宇治川を連続させて、船を通す施設です。

昔は、たくさんの船が閘門を通して、伏見と大阪の間を行き来していた。

現在、道路や鉄道の発達で、交通路としては利用されていないが、地域との関わりが深く、歴史的にも大変貴重な施設で地域のランドマークとなっている。



三栖閘門と三栖閘門資料館



三栖閘門は伏見港と宇治川を結ぶ施設として昭和4年(1929)に造られました。2つのゲートで閘室内の水位を調節し、水位の違いで宇治川と宇治川を連続させて、船を通す施設です。

昔は、たくさんの船が閘門を通過して伏見と大阪の間を行き来していました。

現在、道路や鉄道の発達にともない、交通路としては利用されていませんが、地域との関わりが深く、歴史的にも大変貴重な施設です。

宇治川(ごうかわ)は、「ほりかわ」でも呼ばれています。

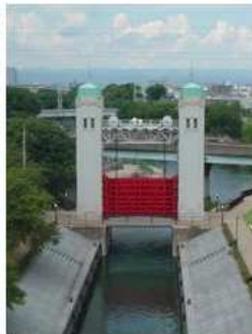


三栖閘門 伏見港側

2012. 5. 15.



三栖閘門



前扉室 (伏見港水路側)



三栖閘門・後扉室 (宇治川側)



◎ 三栖閘門バイパスゲート (前扉)



三栖閘門・前扉室



閘門ゲート



八幡製鉄所の表示

型式	鋼製スライドゲート	門数	2門
扉体幅	1.640m	扉体高	1.480m
揚程	1.200m	扉体重量	0.687t
設置年月	昭和62年3月	製作	近畿設備株式会社

◎ 三栖閘門・後扉室側の旧巻上機



伏見港の入口 三栖閘門



伏見港から宇治川への出口 三栖閘門 現在は宇治川の水位が下がり使われていない



もう閘門は動いていませんが、閘門内の船着場から 伏見港水路に出てきた観光十石舟 2012. 5. 15.



三栖関門の南側 宇治川の向こうには 旧巨椋池が埋め立てられて出来た広々とした田園地帯が広がっていました 2012. 5. 15.



三栖閘門 宇治川土手より 三栖閘門の出口 伏見港の入口です

三栖閘門の南側

宇治川の向こうには 旧巨椋池が埋め立てられて出来た広々とした田園地帯
また、京都へ伸びる宇治川基撰山発電所からの送電線が川をわたってゆく

2012. 5. 15.





閘門の北側にもうひとつの放水路
三栖洗堰がみえる
また、宇治からの送電線がこちらに
渡ってくる





三栖洗堰 2012.5.15.

三栖閘門と対をなす三栖洗堰

濠川の水量調節に今も働いている。

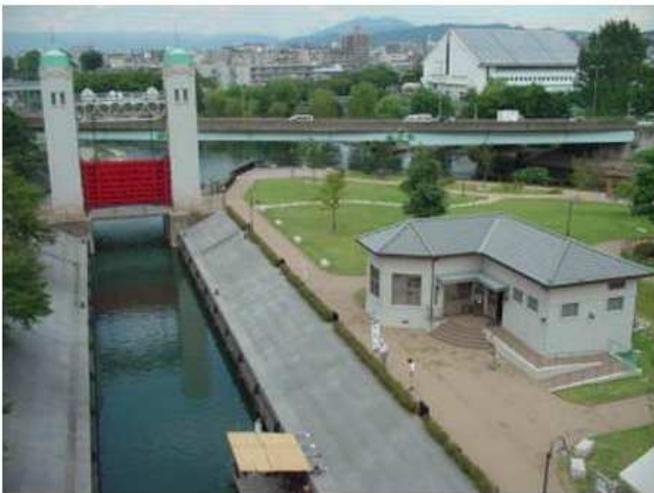
現在の宇治川と洗堰の位置関係 落差の大きさにびっくり。

これは、上流側に設けられた関西の大水壩で天瀬ダムの完成で水位・水量が大幅に落ちたためと見える。

この宇治川の水量低下で 三栖閘門の機能は失われ、

現在 宇治川から伏見の港・水路に直接船で入ることは出来ない。





三栖閘門と三栖洗堰の間の三角島に立つ三栖資料館 伏見港・閘門の歴史資料を展示 2012.5.15.

高瀬川の開削でより栄えた伏見港

大坂から船によって運ばれてきた物資は、伏見港で荷揚げされたのち、船路を利用して京都へと送られていました。これを一変させたのが、1614年(慶長19)の高瀬川開削でした。この運河の開削により、伏見港に集積された物資は船を使って京都の町へと運ばれるようになりました。高瀬川の整備によって、伏見港は大坂と京都の町を結ぶ幹線となり、よりいっそう発展しました。

1 運河として誕生した高瀬川

3年もの月日をかけて完成した、伏見港と京都府内を結ぶ高瀬川。開削は1614年(慶長19)から始まり、1617年(慶長22)から完成まで約3年かかり、全長11.1kmの運河となりました。運河の平均幅は約10m、水深は約1.5m。高瀬川は、大坂と京都の町を結ぶ幹線となり、よりいっそう発展しました。

2 高瀬舟で運ばれた物資

材木、穀物、米、塩などを積んで、川上をめざす高瀬舟の一行。高瀬川は、大坂と京都の町を結ぶ幹線となり、よりいっそう発展しました。

Column

文楽・音曲師が1916年(大正5)に発見した小説「高瀬舟」

高瀬川を舟で下る、舟を引いた舟人と、運送する客の物語です。高瀬川は舟で下る、舟を引いた舟人と、運送する客の物語です。高瀬川は舟で下る、舟を引いた舟人と、運送する客の物語です。

城下町「伏見」の誕生

伏見の本格的な発展は、豊臣秀吉の伏見城築城に始まります。天下統一後、1583年(天正11)に大坂城を、1585年(天正13)には京都に築城を遂げた秀吉は1591年(天正19)に奥白旗を築いた伏見に城を築きます。伏見を造ったのは、大坂と京都、奈良に目をとく地だったからです。ここでは秀吉が伏見に建てた城と城下町の様子をご紹介します。

1 築城

1591年(天正19)に大坂城を、京都・長岡の築城と併せて築きました。秀吉は、この城を築き、その城下町を築きました。この城下町は、大坂と京都の町を結ぶ幹線となり、よりいっそう発展しました。

2 指月城

「下丸」を築いて建てた、指月城。大坂の南に築かれた、指月城は、大坂と京都の町を結ぶ幹線となり、よりいっそう発展しました。

3 向島城

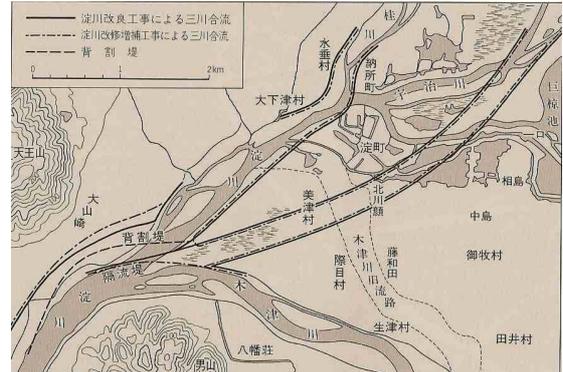
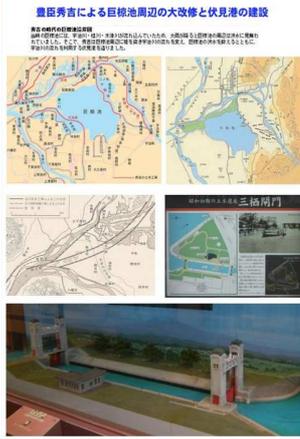
指月城の北側に築かれた、向島城。大坂の北に築かれた、向島城は、大坂と京都の町を結ぶ幹線となり、よりいっそう発展しました。

4 伏見城

豊臣秀吉が築いた大坂城の南に、秀吉が築いた伏見城。大坂の南に築かれた、伏見城は、大坂と京都の町を結ぶ幹線となり、よりいっそう発展しました。

5 城下町「伏見」の誕生

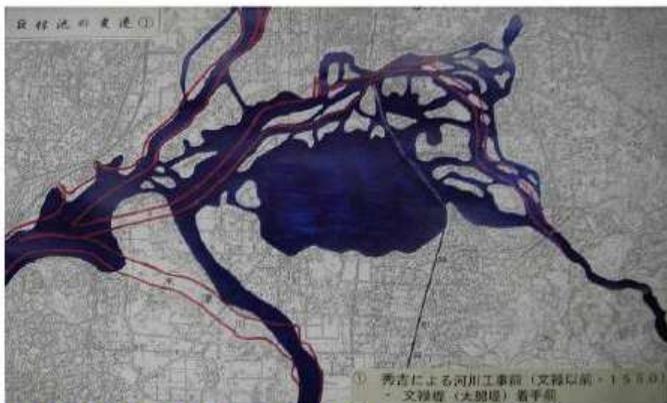
1591年(天正19)に築かれた、伏見城。大坂の南に築かれた、伏見城は、大坂と京都の町を結ぶ幹線となり、よりいっそう発展しました。



【秀吉による巨椋池周辺の大改修】

【淀川の大治水工事】

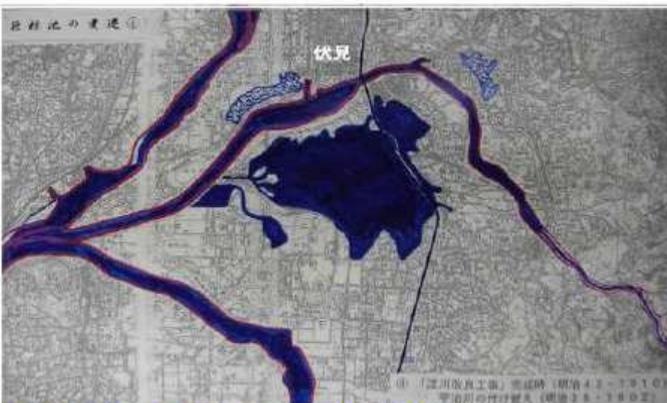
淀川改修・巨椋池干拓と三川合流点周辺の地形変化



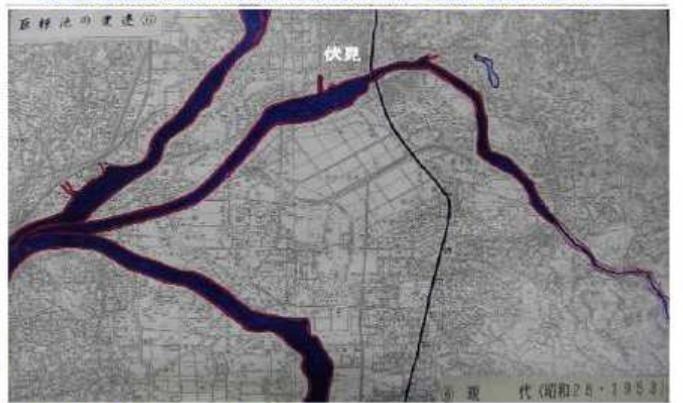
秀吉による河川工事前平安時代のままの姿
文禄堤（太閤堤）着手前 文禄以前（1590）



秀吉による河川工事後 文禄5年（1596）
・文禄堤の築造。左岸連結堤の概成・文禄堤により宇治川と巨椋池の分離
・秀吉の建設した城下町伏見に港が設けられ、交通の要衝になった



明治の改良後 明治18（1885）木津川の付け替え
明治35（1902）宇治川の付け替え



昭和の改修・巨椋池干拓後（現在）
巨椋池干拓 大正7年（1918）～昭和16年（1941）
三川合流点の道流堤、引堤等 昭和8年（1933）
今の堤が完成 昭和43年（1968）



宇治川派流との分岐点 角倉了以の碑があるであい橋 2012.5.15.





伊治川派流 京橋と蓬萊橋の間の寺田屋敷に「竜馬お龍」の碑 2012.5.15.

伏見の商店街 竜馬通りにかかる 蓬萊橋 2012.5.15.
水路沿いの道を右がり、伏見の街をすぐ横の寺田屋へ



坂本竜馬が襲撃された寺田屋 2012.5.15.



坂本竜馬が襲撃された寺田屋 2012.5.15.



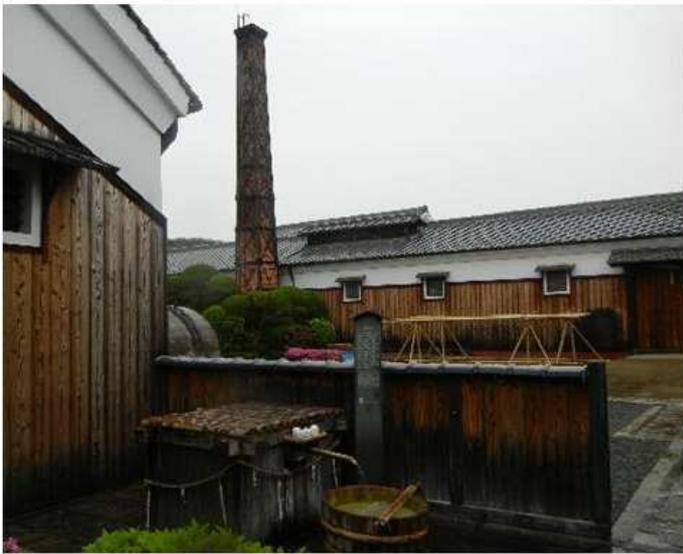
伏見の街中 酒蔵の界隈 2012. 5. 15.

伏見の酒蔵の界限 2012. 5. 15.





月桂冠 大倉記念館 正面 2012.5.15.



月桂冠 大倉記念館 2012.5.15.









丹波橋近く 下板橋通りを東から西へ疎水を渡ると酒造工場の前に
薩摩島津藩伏屋敷跡 寺田屋から脱出した坂本竜馬が逃げ込んだところ



伏見の濠川北部・疎水の町並みの中に 秀吉の時代 商人町として栄えた「尼崎」「堺」の名を見つける

秀吉伏見築城の折り、堺や尼崎の職人たちが伏見城下に移され、
彼らの住む町が、今も尼崎町堺町の地名が伏見に残っている。

堺とともに尼崎は中世の末から豊臣時代にかけて、 港町・寺内町として栄えた日本有数の自治都市だった

瀬戸内海を通して西国から都へ輸送されるさまざまな物資が往来し、なかでも京や奈良の巨大社寺を造営する材木を西国から運ぶ中継港として、大物や尼崎の港は大いに栄えるとともに、大覚寺や本興寺を中心にそれぞれ寺内(境内)や門前に町屋を展開し、独立した町と寺社門前の集合体として堺とともに 中世日本有数の自治都市となった。

この頃の尼崎は港町として、船頭・水主や、陸上の物資を運ぶ馬借などがいただろう。また、米、塩、油、材木などが海上ルートから入ってきたと考えられ、これらを保管する土倉(倉庫業者しばしば高利貸業も)その他の商人や手工業者そして僧侶や武士も居住し、また漁民や農民も少なくなかったと推定される。こうした都市住民が結集して、都市共同体を形成していたと考えられている。



<< 秀吉の味噌すり 尼崎 寺町の廣徳寺にある石碑 >>

明智光秀を追討する秀吉は、尼崎で軍勢から離れ一人になってしまう。明智勢から身を隠すため駆け込んだのが当時大物にあった廣徳寺。髪の毛を剃り落とし僧に化け、台所で味噌をするという迫真の演技で敵をやりすごしたという。

『絵本太閤記』に記された逸話だが、史実として明らかではない。

絵本太閤記・十段目尼崎の段は脚色があると思っていましたが、
この話は小さい時から史実と思っていました。

どうも そうでないらしい。



寺町の廣徳寺にある石碑



聚楽橋を渡ったところ まっすぐ北へ竹田街道が続く 2012.5.15.

濠川が直角に東へ曲がり、疎水(東高瀬川)となる角にある竹田街道 聚楽橋の北岸へ出ると街歩きもおわり



【添付 参考資料】

1. 京都 伏見の港 繁栄の歴史 概説
2. 角倉了以による高瀬川開削とその後の琵琶湖疏水(鴨川運河)開削

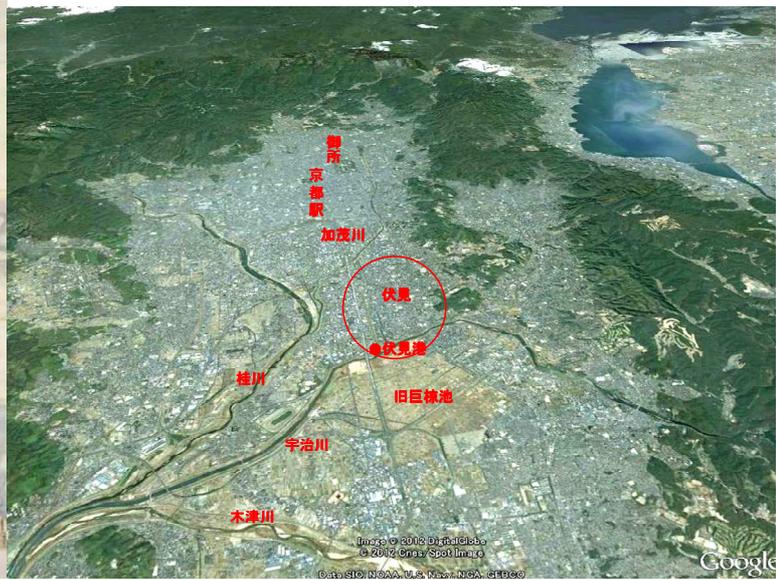
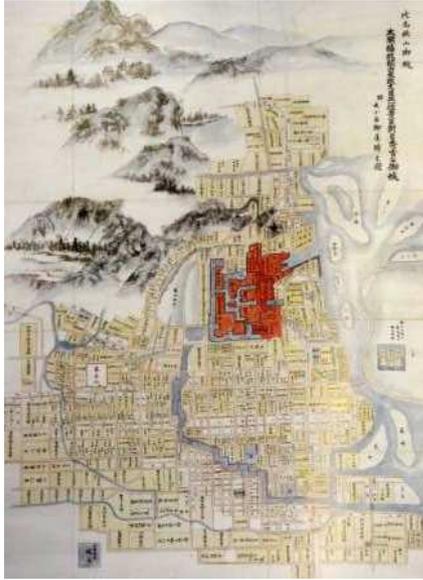
知っているようで知らなかった 京都 伏見の港・街を歩く

【参考】

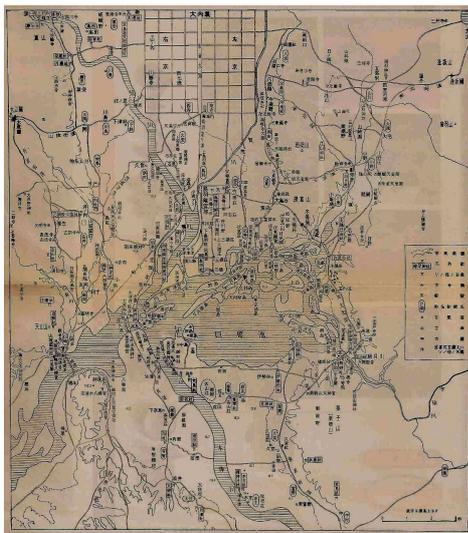
1. 京都 伏見の港 繁栄の歴史 概説

文禄3年（1592）秀吉による巨椋池・淀川三川合流点周辺の改修と伏見港の建設

伏見港は秀吉によって作られた人工の城下町・港町



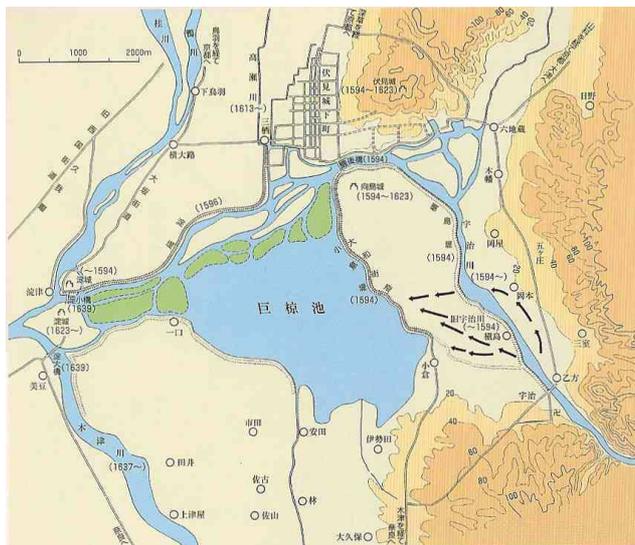
京都伏見周辺は大阪へ流れ下る桂川・宇治川・木津川の三河川の合流点の交通の要衝に位置する京都盆地南端の最低地で、もともとは南に広大な巨椋池が広がり、三河川の水路が複雑に入り組んだ低湿地帯の北岸であった。



秀吉以前 淀川へ注ぐ桂川・宇治川・木津川 三河川合流点 伏見周辺のもともとの姿

文禄元年（1592）年 豊臣秀吉がこの地に伏見城の建設を始め、伏見城築城とともに城下町の町割や開発を急速に進め、伏見城下整備の一環として、1594年（文禄3年）宇治川の治水および流路の大幅な変更を目的として、一般に「太閤堤」と呼ばれる槇島堤や小倉堤の建設をはじめとする大規模な工事を行ない、伏見には、宇治川と濠川を結ぶ形で港を設けた。同時に宇治橋の撤去および巨椋池を介した交通の要衝であった岡谷・津与（淀）津の役割を廃し、小倉堤の上に新設した大和街道と城下を直結する位置に肥後橋を設け、陸上および河川の交通を伏見城に集中させた。伏見城下は武家屋敷、寺社、町家、道路などの区画整理を行ない、城郭の西側を流れ、町の中心部を囲むように外堀が掘られた。掘り上げられた土砂でさらに西部の低湿地帯を埋立て、町人居住区の中核として南北に縦貫する京町通と両替町通が作られて、現在の町の原型を形作られた。

これらの大土木事業により、伏見城下・伏見の港は、大阪・京都そして日本各地を結ぶ交通の要衝となり、各地の有力大名や大名に呼び寄せられた数多くの商工業者が住み、三十石船が伏見と大坂の間を行き来する政治・経済の中心地として繁栄する。当時は、伏見～大坂間が淀川の舟運、伏見～京都間は陸上交通というのが一般的であり、伏見は舟運と陸路の中継点として重要な役割を果たしていました。淀川には秀吉が運航許可を与えた過書船が行き来していました。



秀吉の時代の巨椋池沿岸図

当時の巨椋池には、宇治川・桂川・木津川が流れ込んでいたため、大雨が降ると巨椋池の周辺は洪水に見舞われていました。そこで、秀吉は巨椋池周辺に堤を築き宇治川の流れを変え、巨椋池の洪水を抑えるとともに、宇治川の流れを利用する伏見港を造りました。

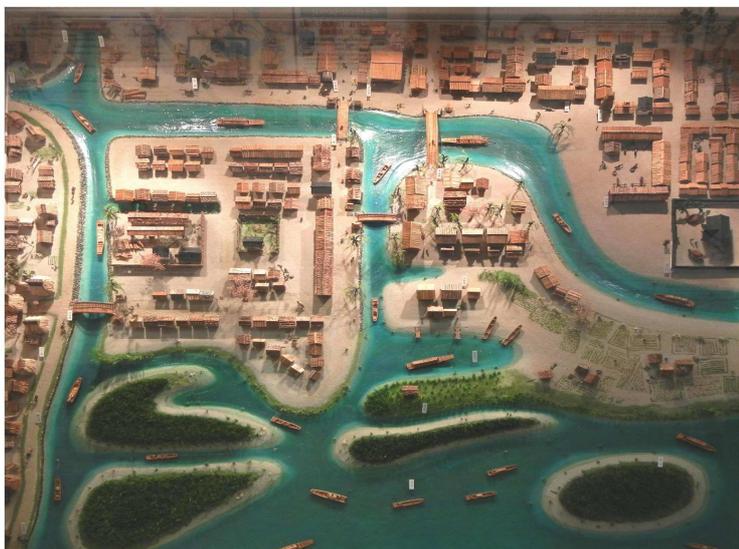
伏見城

驚異的な速さで完成した大規模な城郭、そして秀吉の夢の終わり……。

秀吉は、1596年（慶長元）に指月城が大地震で倒壊すると、その10日後に指月城から1kmほど東北にある木幡山に新しい城を建てはじめます。翌年にはすでに本丸が竣工し、さらにその翌年には天守や殿舎も完成して秀吉と子どもの秀頼が入城しました。その規模は壮大で、多くの内堀を巡らした東西760m、南北870mにおよぶ大城郭でした。また城内には舟入御殿や茶亭、茶道の学問所が設けられました。秀吉は1598年（慶長3）8月、この城で最期を迎えています。



加藤次郎作成の伏見城復元図（加藤1953による）



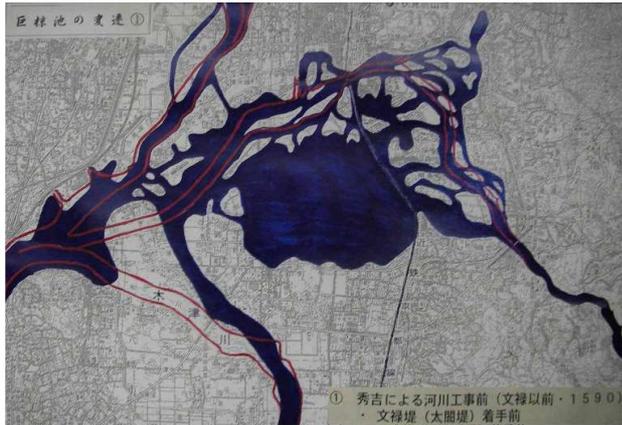
伏見港と伏見の町

1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いにより、天下を掌握した徳川家康は、秀吉のまちづくりを引き継ぎ、伏見は江戸時代になっても依然として日本最大の城下町であり、政治都市でもありました。問屋や宿屋が建ち並び、酒造や竹細工など伏見独自の産業も生まれてきました。人口は増加し、伏見は庶民のまちとして大いに発展していきます。伏見と大坂間を通信船（三十石船）が行き来するようになると、伏見港は物資だけでなく多くの旅人で賑わうようになりました。1635年（寛永12）に参勤交代が制定されると、西國の大名は大坂から船で伏見港に上陸し、東海道を江戸へ向かうようになりました。このため伏見には多くの大名屋敷・倉庫・旅館が並び、伏見港は「京都と大坂を結ぶ」から「西國と東國を結ぶ」重要な拠点へと発展しました。この模型は、江戸中期の古地図を基に制作しましたが、町並みは少し誇張されています。



伏見城開府初期の城下町図（伏見城山内閣蔵）

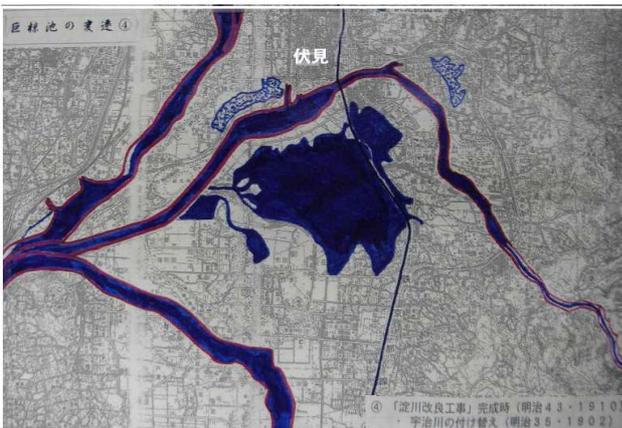
淀川改修・巨椋池干拓と三川合流点周辺の地形変化



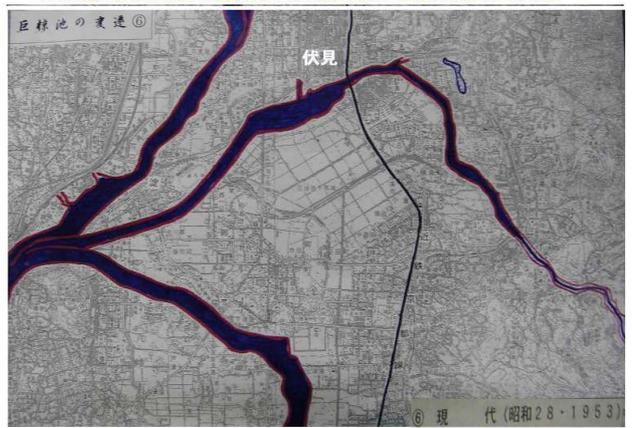
秀吉による河川工事前平安時代のままの姿
文禄堤 (太閤堤) 着手前 文禄以前 (1590)



秀吉による河川工事後 文禄5年 (1596)
・文禄堤の築造、左岸連続堤の概成 ・文禄堤により宇治川と巨椋池の分離
・秀吉の建設した城下町伏見に港が設けられ、交通の要衝になった



明治の改良後 明治18 (1885) 木津川の付け替え
明治35 (1902) 宇治川の付け替え



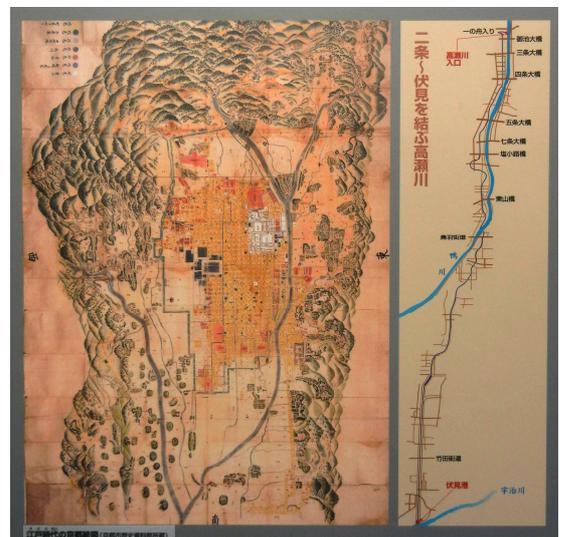
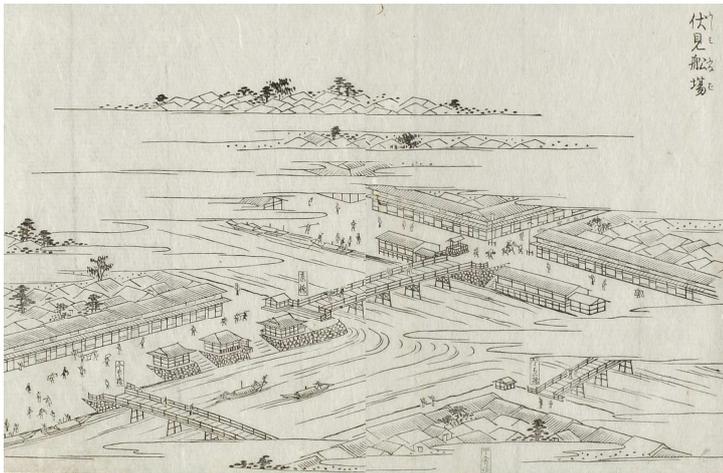
昭和の改修・巨椋池干拓後 (現在)
巨椋池干拓 大正7年 (1918) ~昭和16年 (1941)
三川合流点の道流堤、引堤等 昭和8年 (1933)
今の堤が完成 昭和43年 (1968)

◎ 1614年 (慶長19) 角倉了以による高瀬川を開削

伏見城が廃城となった後の江戸期も 伏見は交通の要衝として栄える。

特に京都の豪商・角倉了以が、1614年 (慶長19) に高瀬川を開削し、高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり京都と伏見が結ばれたことから、港の役割はさらに増した。伏見港は伏見と大坂を航行する過書船、伏見と京都を行き来する高瀬舟の発着点となり、舟運交通の中継拠点としてさらに繁栄を遂げていきました。

幕府の伝馬所 (問屋場) も置かれ、参勤交代の大名が立ち寄るために本陣や大名屋敷も置かれていた。幕末期には坂本龍馬が伏見港の船宿である寺田屋を常宿としていたのは有名である。



1614年 (慶長19) 角倉了以による高瀬川を開削

◎ 淀川の治水と淀川水運の両立のため 明治27年(1894)琵琶湖疏水(鴨川運河)の開通



淀川は昔から氾濫を繰り返し、そのたびに伏見周辺の住民は洪水に悩まされてきた。

伏見周辺の治水の歴史は豊臣秀吉が伏見に城下町を築いた時から始まり、土木行政の近代化が急速に進んだ明治時代にはオランダ人技師ヨハネ・デ・レーケらの指導による大規模な治水工事が行われた。

- ・ 明治18年(1885) 木津川の付け替え
- ・ 明治35年(1902) 宇治川の付け替え

これにより、ほぼ現在の淀川の姿となったが、さらに大正・昭和になっても治水工事が続けられた。

鴨川運河(琵琶湖疏水)の開削 明治25年(1892)

京都に近代化をもたらした琵琶湖疏水の分流的性格を有する水路が開鑿された。これが鴨川運河とよばれている。

“「鴨川運河」 琵琶湖疏水の建設に引き続き開削された水路。明治25年(1892)に着工、同27年(1894)9月に開通。鴨川の夷川の地点から鴨川東岸に沿って南下し、七条以南は鴨川筋を離れて伏見に達する。勾配の関係で途中8ヶ所に閘門をもち、28年(1895)には伏見にインクライン(傾斜鉄道)が完成、高瀬川が薪炭・肥料など日用物資の移入ルートに用いられたのに対し、産業物資輸送を目的とする。これにより、大津—琵琶湖疏水—鴨川運河—伏見の全長20キロ余の舟運ルートが完成した。”

なお、背割堤は京都府八幡市の北辺に位置し宇治川と木津川を分ける細長い桜堤の堤防で、明治初期、木津川の付け替え工事に伴ってできた宇治川左岸、木津川右岸の堤防の一部。明治30年(1897年)から宇治川の改修工事が始まり明治43年(1910年)に完成し現在の姿となり「背割堤」と呼ばれるようになりました

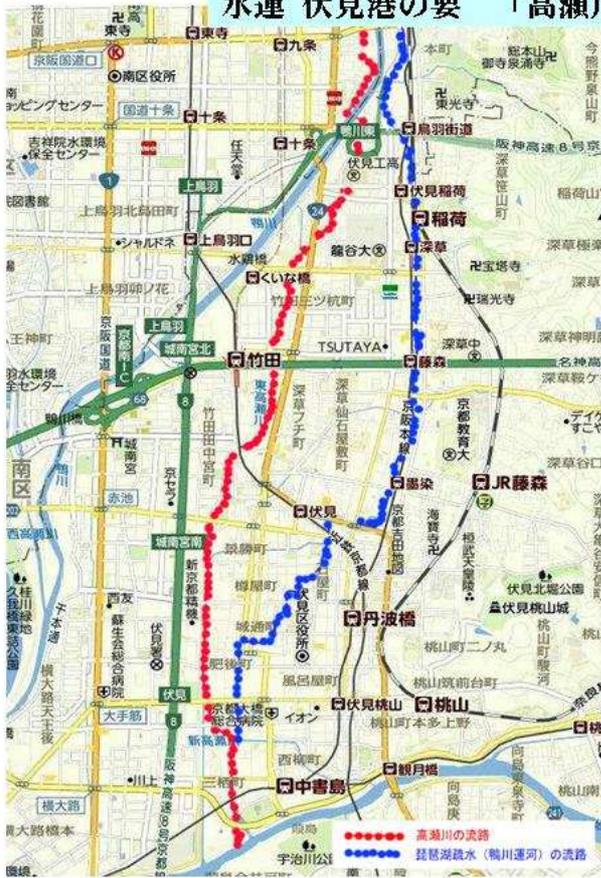
明治27年(1894)琵琶湖疏水(鴨川運河)が開通すると疏水とも接続し新たな水運のルートが拓かれた

ほか、宇治川も新たに開削されたことから琵琶湖への大型船の就航が可能となり、大阪や琵琶湖へ蒸気船(外輪船)が就航した。しかし、鉄道や道路の発達に伴い、物資輸送量は減少し、大正9年(1920年)に水運は廃止。

1929年、宇治川の堤防が整備され宇治川と濠川に水位差が生じたため三栖閘門が建設される。

蒸気船による水運は京都市と大阪市などを結ぶ鉄道が開通したことや淀川(宇治川)での水運の衰退とともに港も衰退した1962年(昭和37)には貨物船輸送も完全になくなります。

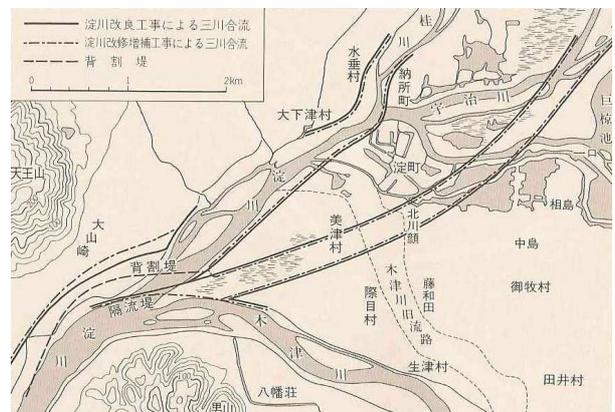
水運 伏見港の要 「高瀬川」と琵琶湖疏水（鴨川運河）



◎ 昭和の治水 1929年

昭和10年（1935年）に起きた鴨川大洪水のあと、鴨川の河川改修の一環として鴨川の川底の浚渫が行われ、鴨川の川底が2m程度低くなった。そのため、高瀬川が北から鴨川に流入する地点は十条通付近まで移され、また一方で鴨川横断点の下流側（東高瀬川）では鴨川からの取水が不可能となり、高瀬川は分断されることとなった。

右図の”三川合流点付近河道代替図<宇治>”の大山崎の南東部の一点鎖線は淀川改修増補工事（昭和8年完成）による桂川右岸側の掘削拡幅を示している。



◎ 伏見港入口に三栖閘門・洗堰の建設



三栖閘門は、宇治川の大正洪水(1917)をきっかけに昭和の治水工事により、宇治川と伏見の濠川に水位差が生じたため1929年 伏見港の入口となる宇治川と濠川との合流点に三栖閘門が建設され、船の通行だけでなく、治水施設としても

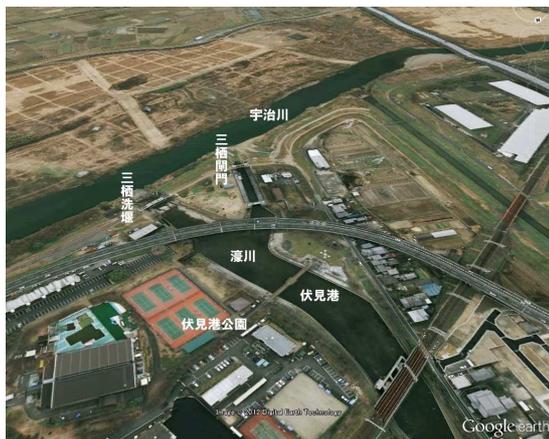
1930年 重要な役割を果たした。

1922年に始まった宇治川右岸 観月橋から三栖までの堤防整備により、宇治川と濠川に水位差が生じたため1929年 宇治川と濠川との合流点に閘門を設け、舟の通行ができるように三栖閘門が建設された。

1962年に船運がなくなり、天ヶ瀬ダム completionで宇治川の水位が低下したため、三栖閘門はその役割を終えました。

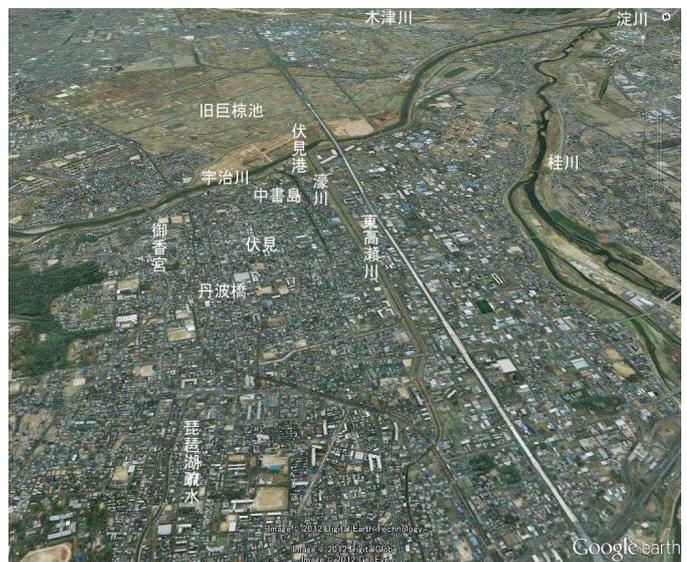
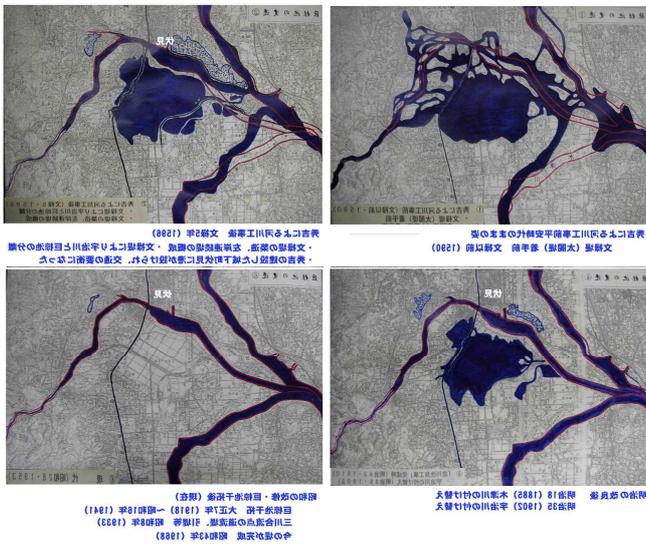
第二次世界大戦後はほとんど使用されず放置されていた伏見港は1967年、跡地を埋め立てて公園とする都市計画が決定され事業化されたことにより港湾機能を喪失した。

周辺には京橋・表町・柿ノ木浜・金井戸・北浜・西浜・南浜・東浜・弁天浜・材木町といった、港町に因んだ地名が残っている



伏見港・濠川から眺めた宇治川への出口に設けられた左:三栖洗堰 右:三栖閘門 2012.5.15.

伏見川の流域を流合川三つ流千代目・御堂川系



【参考】

2. 角倉了以による高瀬川開削とその後の琵琶湖疏水(鴨川運河)開削



高瀬川の開削 1614年(慶長19)角倉了以による高瀬川を開削

高瀬川(京都府)高瀬川(たかせがわ)は、江戸時代初期(1611年)に角倉了以・素庵父子によって、京都の中心部と伏見結ぶために物流用に開削された運河である。開削から大正9年(1920年)までの約300年間京都・伏見間の水運に用いられた。現在は鴨川において京都側と伏見側で分断されており、上流側を高瀬川、下流側を東高瀬川、新高瀬川と呼ぶ。

伏見城が廃城となった後の江戸期も伏見は交通の要衝として栄える。

特に京都の豪商・角倉了以が、1614年(慶長19)に高瀬川を開削し、高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり京都と伏見が結ばれたことから、港の役割はさらに増した。伏見港は伏見と大坂を航行する過書船、伏見と京都を往来する高瀬舟の発着点となり、舟運交通の中継拠点としてさらに繁栄を遂げていきました。幕府の伝馬所(問屋場)も置かれ、参勤交代の大名が立ち寄るために本陣や大名屋敷も置かれていた。幕末期には坂本龍馬が伏見港の船宿である寺田屋を常宿としていたのは有名である。



1614年(慶長19)角倉了以による高瀬川を開削

鴨川運河（琵琶湖疏水）の開削 明治25年(1892)

京都に近代化をもたらした琵琶湖疏水の分流的性格を有する水路が開鑿された。これが鴨川運河とよばれている。

「鴨川運河」 琵琶湖疏水の建設に引き続き開削された水路。明治25年(1892)に着工、同27年(1894)9月に開通。鴨川の夷川の地点から鴨川東岸に沿って南下し、七条以南は鴨川筋を離れて伏見に達する。勾配の関係で途中8ヶ所に閘門をもち、28年(1895)には伏見にインクライン(傾斜鉄道)が完成、高瀬川が薪炭・肥料など日用物資の移入ルートに用いられたのに対し、産業物資輸送を目的とする。これにより、大津—琵琶湖疏水—鴨川運河—伏見の全長20キロ余の舟運ルートが完成した。〃

鴨川運河は鴨川夷川出合から伏見堀詰までで完成時諸元は以下のとおり。

総延長 4920.48 間 (8945.45m)、うち掘割 3870.38 間 (7036m)、築立 1050.10 間 (1909.09m)。

また平均勾配 1:4000、幅 19.8 尺 (6m)、水深 3.3-3.96 尺 (1-1.2m)。

附属施設は閘門8(仁王門・孫橋・三条・四条・松原・五条・正面・七条)、橋梁40、暗渠5、笕3、堰止3、インクライン1、船溜り3。

現状

本流は蹴上船溜から蹴上発電所を經由し南禅寺船溜に放水される。

白川としばらく流路を共用して、夷川ダム、夷川発電所を経て鴨川東岸に至り、以鴨川東岸(左岸)を塩小路までは川端通下を暗渠で、以後は開渠となり鴨川を離れて墨染ダムに至る。

墨染ダムからは伏見インクライン(国道24号の拡幅用地に転用され現存せず)を経て伏見区堀詰で旧伏見城外堀の濠川につながり、ここを本線の終点とする。

この先、旧伏見港、三栖閘門を経て宇治川に放水する。もしくは終点やや上流の津知橋付近で疏水放水路・東高瀬川の経路も作られている。

このうち、南禅寺船溜から冷泉の田辺橋の鴨川出合までを鴨東運河と称して開通時のもの、鴨川出合より下流の部分を鴨川運河と称して後の事業によるものである。

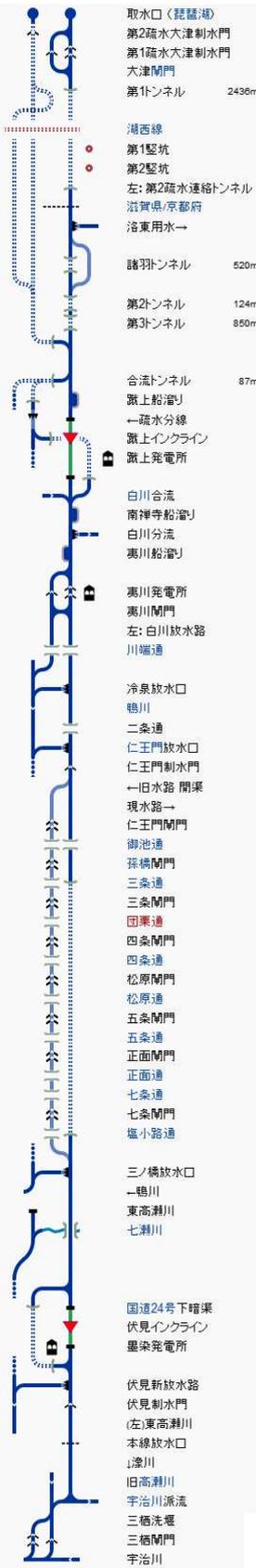
高瀬川(京都府)高瀬川(たかせがわ)は、江戸時代初期(1611年)に角倉了以・素庵父子によって、京都の中心部と伏見結ぶために物流用に開削された運河である。開削から大正9年(1920年)までの約300年間京都・伏見間の水運に用いられた。現在は鴨川において京都側と伏見側で分断されており、上流側を高瀬川、下流側を東高瀬川、新高瀬川と呼ぶ。



高瀬川と琵琶湖疏水(鴨川運河)水路図



琵琶湖疏水



高瀬川

